楓物語

バリスタ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転校した学校に吸血鬼が居る

なんて小説より不思議な話信じてくれます？

これは私の…

長い長い前日譚

青春はちょっと不思議な物語

目次

かえでトランスファー

かえでトランスファー　其ノ壱 ―― 1

かえでトランスファー？　其ノ弐 ―― 10

かえでトランスファー　其ノ参 ―― 18

かえでトランスファー　其ノ肆 ―― 23

かえでトランスファー　其ノ伍 ―― 29

かえでトランスファー　其ノ陸 ―― 34

ひたぎエンカウンター

ひたぎエンカウンター　其ノ壱 ―― 41

ひたぎエンカウンター　其ノ弐 ―― 47

ひたぎエンカウンター　其ノ参 ―― 52

まよいキャリー

まよいキャリー　其ノ壱 ―― 59

まよいキャリー　其ノ弐 ―― 66

まよいキャリー　其ノ参 ―― 73

まよいキャリー　其ノ肆 ―― 88

するがハンド

するがハンド　其ノ壱 ―― 94

するがハンド　其ノ弐 ―― 100

するがハンド　其ノ参 ―― 112

かえでトランスファー

かえでトランスファー　其ノ壱

００１

この物語は…私の始まりの物語…

そして…ゴールデンウィークに起きた

とある出来事の私視点である

まぁ…今となっては懐かしい限りである

何もかもが…

００２

「えっと…本来は４月に転校してくる予定だったんですが

色々ありまして…ＧＷ前日に転校する羽目になりました…

篠宮　楓です…よろしくお願いします」

先生

「という訳で、だいたい来週位から

仲良くしてやれ

阿良々木、羽川　、

校内の案内やこの街の案内やらをしてやれ」

今…名前が挙がった方達が学級委員ですかね？

？

「はい、解りました」

？

「…はい…」

００３

放課後

楓

「えっと？」

暦

「僕の名前は阿良々木…

？阿良々木暦だ」

楓

「阿良々木さん」

なんというか…その頭の特徴的な毛は一体…

動いた!?

翼

「私の名前は羽川翼です、よろしくね」

楓

「羽川さん…よろしくお願いします」

…おぉ…おっきい…負けた…

翼

「とりあえず、ＧＷ明けてから
校内は案内するね」

楓
「ありがとうございます」

うん…1週間も空いたら
忘れちゃう…

暦
「って事は…街の案内？
ってなんだよ…」

楓
「あ…私…この街に今朝
着いたばかりだから…家にも行けてないの…」

暦
「どういう事!?」

００４

なんというか…私…基本運がなくて…
単身こちらに引っ越してくる最中の飛行機が
国内線なのにハイジャックにあって…

その事情聴取やらで…1週間…

やっと解放されてこの街に来るバスで

バスジャック…

また事情聴取等で1週間…

本来は四月の二、三週ぐらいには
こちらに来れるように調整したのに…

色々あって…GW前日に転校の流れに…

005
暦
「逆にすごいな…」

阿良々木さん…軽く引いてますよね…

楓
「…とりあえず…今日は帰る感じですか？」
翼
「うん…あ、その前に連絡先…
交換しよ？」

これは嬉しいお話です
連絡の取れる級友は大切です

楓
「はい……あれ？
？えっと…どこいった？」
暦
「…ええ…」
楓

「…引っ越し荷物の中？
いやいや…最後に見たのいつだっけ…
あ…バスジャック…盗られて…川底…」
…今頃…海に流れ着いた頃かしら…

翼
「あは…ははは……
じゃあ、とりあえず…明日の１０時に
楓さんの家の最寄り駅に集合しましょう」

楓
「…鍵…ある…，
場所のメモ…ある…」
これが無かったらさすがに帰れない…
あって良かった紙のメモ

翼
「…あれ？この住所…」
暦
「うちの隣…だよな…」
翼
「なんと！」
楓
「あの大きい家、阿良々木さんの
ご家族の家だったんですか！」
暦

「いや待て、それを言うなら
お宅も大概だよ!?」

楓

「あー…そんななってます?」

暦

「え?」

楓

「実は場所だけしか確認してないんです…」

暦

「あー…なら行ったら驚くと思うよ…」

006

羽川さんと別れ阿良々木さんと共に自宅へ

楓

「…な…」

んーと…これは…私の家でいいんだよね?
うん…鍵が合って開いたわ…
表札も…篠宮…郵便は…私宛の手紙…

うん…私の家だ…

楓

「なんちゅうデカさだよ!」

お隣(阿良々木家)さんといい勝負だよ!

？

「ん？なんか叫び声が聞こえたけど…兄ちゃん
そんな所で何やってんだ？」

暦
「あぁ、火憐ちゃん、こちら
お隣さん」

楓
「えっと…初めまして…
お隣に引っ越してきた
篠宮？楓と申します…」

火憐
「楓さんね、覚えた！よろしくな！」

なんか…1本…1束？
毛がピコピコ動いてる…

楓
「…お姉さん？」

暦
「…妹」

楓
「…はぇ…」

暦
「下にもう一人、妹がいる」

楓
「はぇ…」

火憐

「なんか困った事があれば私達
ファイヤーシスターズを頼ってくれてもいいぜ！」
楓
「ファイヤー…シスターズ？」
暦
「…正義の味方ごっこだよ…」

００７

なんか…あの後…兄妹喧嘩が始まったのでそそくさと
逃げてきました…
楓
「…いや…にしても広いよ…
とりあえず荷解き…」

かれこれ２時間…もう夜の７時だよ…
楓
「ご飯作らなきゃ…」
ピンポーン
楓

「誰だろ？」

インターホンのカメラの先にいたのは
阿良々木さんだった

暦
『篠宮、飯食ったか？』

楓
「いや…まだです」

暦
『なら、うちで食わないか？
母さんが誘って来いって』

楓
「いいの？まだ出会って一日目だよ？」

初対面からやっと隣に越してきた人に
ランクアップしたばっかりだよ？

暦
『ん？それがどうした？』

楓
「…じゃあ…ご相伴にあずかります」

そうか…この人はきっと…いい人だ
？

かえでトランスファー　？　其ノ弐

００８

『ギャァァァ！』

楓

「何事!?」

荷解き中に叫び声が聞こえた…
…方向的にも…声色的にも…
多分阿良々木さんなんだろうけど…

楓

「…まだ時間あるし…
生活必需品だけでも出しとかなきゃ…」

結局昨日…あのままお風呂も妹さん達と一緒に入り…
一緒に寝てしまった…

楓

「…布団は元々先に用意してくれてたのがあるし…
お湯も電気も問題ない……
んで携帯も…新しいのが送られてきたと…」

手紙に書いてあったのは
『安否確認のため大体3日に1回
位置情報が送られるように設定したのに
川から動かなかったから一応送った…

届いたら何があったか教えて…お父さん心配！』

楓
「…メールは送ったと…」

『いつものです』
とだけ…多分これで通じる
伝わらなかったらまた送ろう…

００９
楓
「やっと出てきましたね…阿良々木さん」
暦
「あぁ…すまない…」
楓
「さっき…悲鳴聞こえましたけど…
大丈夫ですか？」
暦
「あー…妹に起されただけだから心配いらないよ」
楓
「…はぁ…」
暦
「さてと…駅に向かおうか」
楓
「はい！」

家から最寄りの駅へ

暦
「あ、そうだ…今日出る前に妹と
話してた事なんだけどさ」
楓
「はい？」
暦
「恋ってなんだろうって」
楓
「…また随分と難しい話してますね…」
暦
「いや…事の発端は
僕に気になる人が出来たことから始まるんだけども」
楓
「はぁ…」
暦
「…呼称を入れるとバレるから入れないが…」
楓
「…羽川さんですか？」
暦
「何故バレた!?」
楓
「いや…阿良々木さん…仲良いの羽川さんぐらいしか
思いつかなかったので…」
暦
「…うぐっ…」
楓
「わわっ！ダメージ受けないでください！
自転車が揺れる！」
２人乗りしてます…人通りが少ないので…

０１０

暦
「でだ…好きになるってイマイチ分からないんだ…」
楓
「…また随分とめんど…難儀な性格してますね…阿良々木さん」
暦
「なんか今…訂正しなかった？」
楓
「してませんよ？」
暦
「そう？ならいいんだけど…」
楓
「案外男の子と女の子じゃ
感じ方も考え方も違うし人の性格によっても違うから
コレっていう答えは無いんじゃないかな？」
暦
「ほぉ…
あ、駅前につく…そろそろ」
楓
「あ、はい、降りますね」
暦
「…そういうもんか…」
楓
「…そういうもんですよ…」
暦
「なるほどな…」
楓
「…まぁ…案外阿良々木さんは
自分のことを好きになってくれた人を好きになったりして」

暦
「…どうだろな…ないとも言い切れない」
楓
「っと……ん？」

011

楓
「羽川さん、今日は街の案内お願いします！」
翼
「うん！任せて！」
暦
「あの…羽川？」
楓
「阿良々木さんもよろしくお願いします！」
暦
「あ、うん…」
翼
「…まずは…本屋でも行こうか」
楓
「はい！」

移動中

暦
「…篠宮…なんでスルーしたんだ？」
楓
「あれは…見ないふりが懸命かと…」

翼
「…2人とも…優しいね」
楓
「……」
翼
「私を気遣って聞かなかったんでしょ？」
暦
「……まぁ…」
翼
「大丈夫、転んだだけだから」
楓
「…の割には制服は無事なんですね…」
翼
「!!」
楓
「…事情もあるだろうから深入りはしません」
暦
「…篠宮…悪い…ちょっとあそこのコンビニで
飲み物買ってきてくれないか？」
楓
「あー…分かりました…変なことしちゃダメですよ？」
暦
「しないよ…」

012

さてさて…適当に同じスポーツドリンクを三本買ったけど…
あれ？2人は？

「ガーゼは__とけ、傷__
いきなり__ったらびっ__するだろうから」
ん？
「いや…多分驚かないよ…あの人たちは…
私が髪をバッサリ切っても気付かないよ…
あの人たちは…私の顔も覚えてない」
…めっちゃ重い話してる…っと茂みから出てくる
逃げな……くてもいいか…

楓
「あ、お二人共日陰に避難してたんですね」
暦
「あ、あぁ…まだ４月とはいえ陽射しは侮れないからな」
翼
「そうね…」
楓
「あ、スポーツドリンクなんですが良かったですか？」
暦
「悪いな…買い物頼んで…」
楓
「いえいえ…」
翼
「さて…移動しよっか」
暦
「あぁ」
楓

「はい」

013

翼

「あれは…」

1人道に出る羽川さん

暦

「羽川…どうしたんだ？」

楓

「車通りが無いとはいえ道の上は些か危険ですよ」

翼

「うん…」

その腕には猫と思しき物の亡骸が抱えられていた

楓

「…猫…ですかね…

…損傷もかなり酷い…尻尾…無くなっちゃってる…」

翼

「…2人とも…本屋行く前に…

この子埋めてあげるの…手伝ってくれる？」

暦

「分かった」

楓

「了解です」

かえでトランスファー　其ノ参

０１４

朝です…
荷解きが大体終わりました…
いやぁ…大変だった…

ピンポーン！

楓
「あれ？今日は約束無いはずでは？
はーい！今出まーす！」

火憐
「よっ！楓さん！」
楓
「えっと…火憐ちゃん！」
火憐
「おう！火憐ちゃんだぜ！」
楓
「いらっしゃい、なにか御用？」
火憐
「あ、いや大した事じゃないんだけど
兄ちゃん知らないか？」
楓
「阿良々…暦さん？見てないかな？
どうかしたの？」
火憐

「昨日の夜出かけたっきり帰ってないんだ」
楓
「え…それは一大事じゃない？」
火憐
「いやぁ…春休みにもあったし…
案外明日には帰ってくるだろって母さんが言ってた」
楓
「母強し…」
火憐
「とりあえず兄ちゃんが女の家に転がり込んでないのが
確認できたからいいや、朝早くごめんな！楓さん！」
楓
「うん、大丈夫だよってそっち家と逆じゃ…」
火憐
「これからひとっ走りしてくるんだ！じゃあ！」

…あっと言う間に見えなくなったよ…

０１５
…昨日…そう言えば…
あの猫のお墓参りでもしてあげるか…

ピンポーン
…また？

楓
「はいはーい」
月火
「おはようございます、楓さん」
楓

「あ、月火ちゃん、おはよう」
月火
「お兄ちゃん来てない？」
楓
「火憐ちゃんにも聞かれた…」
月火
「来てないか…」
楓
「私、これから出かけるし見かけたら言っとくよ
『妹さん達が心配してたよ』って」
月火
「お願いします」

０１６

…しまった…お供え物何も持ってきてない…
とりあえず…手を合わせとこう…

ザッザッ
楓
「……何か…このお墓に御用ですか？」
？
「いやなに…ちゃんとお墓の下に
居るべきものがいるか確認しに来たのさ」

楓
「…阿良々木暦という方をご存じですか？」
？

「おや？阿良々木くんの名前が出るってことは
君が話に聞く転校生ちゃんだね？」
楓
「…そうですね…多分その通りです」
？
「…なるほど…君もこちら側か」
楓
「…さて…なんのことでしょうか？」
？
「お墓の下見ていいかな？」
楓
「…多分居ませんよ」
？
「だから確認するのさ」
楓
「…そろそろお名前聞いても？」
忍野
「あぁ、ごめんごめん…
僕は忍野メメ…よろしく」
楓
「忍野さん…」
忍野
「…さてと…君の言う通りこの下には
何もいなかった……埋めたはずの猫の特徴…
聞いていいかな？念の為」
楓
「尾の切れた猫でした…
損傷も酷く…何度か轢かれたのか
体色は灰色になってました」
忍野
「…ふむ…阿良々木くんの証言より

はっきり具体的で有難い」
楓
「…私には何も起きてない…なら…
羽川さんにもなにか起きてませんか？」
忍野
「…委員長ちゃんね…起きてるよ…起きてしまっている
…正直不味いレベルで」
楓
「…そうですか…でしたら…未成年は静かに家に籠ってますね」
忍野
「…そうしてくれると有難い」
楓
「あ、そうだ、阿良々木さんに伝えといて下さい
『妹さん達が心配してるよ』って」
忍野
「あぁ…起きたら伝えておくよ」
楓
「お願いします」

かえでトランスファー　其ノ肆

０１７

夜です

月火
「ふう…スッキリした…」
楓
「いやぁ…またお邪魔しちゃったよ…」

また、阿良々木家です

月火
「気にしないで！ファイヤーシスターズのお節介だから！」
楓
「…ならお言葉に甘えさせてもらうね」

上下肌着の月火ちゃん
上は下着…下はパジャマな私

ガチャン！
月火
「…おや？」
楓
「え？自転車の音？」

ガチャッ！

楓

「キャッ！」
月火
「あ…お兄ちゃ」
月火ちゃんに抱きつく阿良々木さん
月火
「おわっとっと！」
暦
「アァァァァァァ!!」
発狂している阿良々木さん…私には気付いて無さそうだ

月火
「…もう…仕方ないな…お兄ちゃんは…
よしよし…怖かったんだね

はい、いいよ」

…何が!?
いや…唇を実の兄に向けて『いいよ』って
何がいいの!?

暦
「気持ちわるーい！」
流石にツッコんだ！
というか飛んだァ!?

月火
「うわぁっはっ！」
痛そう…
月火

「妹の献身に対して何をするのよお兄ちゃん！」
暦
「教育的指導だ！お前たち姉妹は
どれだけその場のノリで生きてるんだよォ！」
月火
「しょうがないじゃない！お兄ちゃんの妹だし！」
楓
「…クシュン…」
月火
「あ…」
暦
「え？」
…立ち位置的に顔を向けられれば下着が見られてしまう…
私…割とピンチじゃない？

月火
「お兄ちゃん、見ちゃダメ！」

目潰しである…チョキでやる一般的な目潰しである…
一般的な目潰しって…何よ…

暦
「ぐぁあ！目がァ！目がァ！」
月火
「ふう…楓さんの下着姿は守れた…」
暦
「僕の目が無事じゃないんだが…」
楓
「あの…大丈夫？阿良々木…くん」
暦
「…すまん…来てたのに気付かなかった」

楓
「…とりあえず冷やそうか」

０１８

月火
「お兄ちゃん、楓さんを襲わないでね？」
暦
「襲わねぇよ…」
月火
「…それじゃ楓さん、寝る時はまた私達の部屋で」
楓
「うん、分かった」

楓
「とりあえず…無事そうで良かったよ」
暦
「…あぁ…心配かけた」
楓
「伝言は届いた？」
暦
「あぁ…忍野から聞いたよ」
楓
「そう……
阿良々木くん…私達は何もしない…

それが今、大切な事だよ」
暦
「……」
楓
「…あの人はプロでしょ？大丈夫だよ、きっと」
暦
「…忍野の言った通り…
篠宮…お前…」
楓
「…羽川さんは大丈夫…」
暦
「だけど！」

楓？
『この小娘の言う事は…
聞いといた良いぞ、小僧』

暦
「!?」
楓
「…下がって…ってもう居ない」
暦
「なんだよ今の！」
楓
「…獣憑き…」
暦
「獣憑き…」
楓
「…詳しい事は…羽川さんの件が終わったら話すよ」
暦
「…分かった…」

楓

「それじゃ…そろそろ寝ましょう、阿良々木くん」

かえでトランスファー　其ノ伍

０１９
五月一日

５月です…ゴールデンウィーク中の
一瞬の休み明けです

楓
「…羽川さんは来てない…か…」
暦
「あぁ…」

五月二日

今日も羽川さんは居ませんでした

放課後
楓
「…あ、そうだ、阿良々木くん」
暦
「…なんだ？」
楓
「忍野さんにちゃんと挨拶したい」
暦
「…分かった…行こう」

０２０

忍野
「やぁ…阿良々木くん…そろそろ来ると思ったよ…
おや、君は…この間の転校生ちゃん」
楓
「はい、しっかり挨拶はしとこうと思いまして…
篠宮　楓です」
忍野
「篠宮…あぁ…なるほど…」
暦
「…そろそろいいか？」
忍野
「おや？なんだい、阿良々木くん？」
暦
「なんだよ、そのズタボロな姿！」

…言われてみれば…
所々…擦過傷だったりとか…
この間、会った時より…やつれてない？

忍野
「いやぁ…負けちゃった…もう惨敗」
暦
「でも、この間、障り猫は弱いって！」
忍野
「あぁ…弱いよ…弱い…雑魚って言っていいほどだ」
暦
「じゃあ、なんで！」

楓
「…そうか…宿主」
暦
「…どういう意味だ？」
忍野
「簡単な話さ…本来、障り猫は…
僕でも片手間で倒せるくらいの雑魚だ…
まぁ…だからと言って本当に片手間ではやってないさ…
プロだからね…そこは全力でやったよ…
やってこのザマさ…
本来…雑魚であるはずの障り猫が…
知恵をつけた…委員長ちゃんの持つ知識を得た」
楓
「…知恵をつけた獣（猫）は…罠をすり抜けるでしょ？
それと同じ…」
忍野
「僕の持つ…古典的な策は全部…読まれてた
読んだ上で…全部無効にしてきた…」
暦
「…それは…」
忍野
「…でもまぁ…絶望的ってわけでもない…まだ救いはある」
暦
「？」
忍野
「まだ、障り猫の中に委員長ちゃんの意識があるって事だからね」
暦
「…どうして…どこに救いがあるって言うんだよ！」
忍野

「…完全に乗っ取られたらもうおしまいだからさ…
殺すしかなくなる…」
暦
「…！」
忍野
「委員長ちゃんの意識が残っているうちに…
その意識をサルベージしないと…
…化け猫を退治してしまわないと
羽川翼という阿良々木くんの大事なお友達は…
この世から完全に失われてしまう…
という訳さ」
楓
「…でも…忍野さん…負けてるから…」
忍野
「…問題はそこなんだよねぇ…
見つけるのも一苦労…見つけても…
戦闘じゃ負けちゃう…どうしようもない」
暦
「…俺なら見つけられる…と思う…」
忍野
「ほう？その方法は？」
暦
「…俺にしか出来ない方法だ…お前じゃ出来ない…忍野」
楓
「…阿良々木さんにしか出来ない方法…」
暦
「…まずは心渡を貸してもらうことが前提だけどな」
忍野
「…吸血鬼ちゃん…貸してくれるかね…」
暦
「日本古来の頼み方をするよ」

…土下座だろうな…

かえでトランスファー　其ノ陸

０２１

…後日談…というか…今回のオチ？

あの後、阿良々木さんが

『あとは僕がどうにかする…だから

安心して待っててくれ』

といい数日…夜中に出て行っては朝方帰ってくる

という生活が続いていた…

そんなゴールデンウィーク最終日の夜…

阿良々木さんが早めに帰ってきた

多分全部終わったのだろう…

事の顛末は明日聞くことにしよう…

０２２

楓

「…じゃあ、とりあえずは羽川さんは無事なんですね？」

忍野

「そうなるかな」

暦

「あれ？忍野」

阿良々木さんの目線の先には幼い女の子が

忍野

「あぁ…それね…せがまれちゃって…」

暦

「…そうか…」

楓

「羽川さんはこのゴールデンウィークの事は…」

忍野

「委員長ちゃんはこのゴールデンウィークの間の事は
何も覚えてないよ…
…ブラック羽川としての記憶は完全に失っている」

暦

「…ブラック羽川？なんだそりゃ？」

忍野

「あの状態の委員長ちゃんの事さ…
あれを障り猫と呼ぶのは少し違うからね…
新種には新種の名前が必要だ…新しい現代の妖怪…
ブラック羽川」

暦

「…ネーミングセンス無ぇよ…お前…」

私は嫌いじゃない…

忍野

「ご両親をエナジードレインした時点で
委員長ちゃんの意識は一旦戻ったらしいんだ…
その時点で彼女の望みは叶ったからという事かな…」

暦

「望み…」

忍野

「だけどすぐ戻った…否…
委員長ちゃん自身が強く願って
自分から離れかけていた猫を引き戻し
更には取り込んだと言うのが正しいのかな？

その瞬間、新怪異ブラック羽川は誕生したという訳だ」

暦
「…っ…」

楓
「……」
…ブラック羽川…カッコイイ…

暦
「…忍野…新種の妖怪って言うならよ…
羽川はずっと家族と言うなの妖怪に…
疲(憑か)れてた様なもんじゃねぇのかな？」

忍野
「家族ねぇ…でも委員長ちゃんにとってご両親は
家族じゃなかったんだろ？」

暦
「だからこそさ…
羽川にとっては家族ってずっと怪異だったんじゃないかな…」

忍野
「…どうなんだろうね…」

しばしの沈黙…

暦
「でもまぁ…猫になったところで、どうしたところで
羽川は羽川のままなんだと思うと…
やっぱり色々考えちまうんだよ」

忍野

「結婚しちゃえばいいじゃん」

暦

「…はっ!?」

楓

「あぁ…」

忍野

「いやだから…阿良々木くんが委員長ちゃんと
結婚しちゃえばいいじゃん…そうすれば…
委員長ちゃんにはずっと手に入らなかった
家族を持つことが出来るじゃないか」

暦

「いや…悪い冗談だぞ…忍野…」

忍野

「そうかい?良いアイディアだと思うけどね…
春休みに委員長ちゃんから…
手を差し伸べられた恩返しとしては
妥当な取引だとは思うけどね」

暦

「…羽川の気持ちってのがあるだろ…」

忍野

「そりゃ…あるだろ…」

暦

「……」

忍野

「気持ちがあるから魅せられるのさ…
被害者にも加害者にもなる…怪異にもなる…」

楓

「気持ちが…心があるから…ヒトは…人で居られる…か…」
忍野
「そういう事…まぁ…阿良々木くんの気持ちもってのも
あるんじゃないのかい？」
暦
「…僕の…気持ち…」
忍野
「僕はてっきり…阿良々木くんは委員長ちゃんに
恋しちゃってるんじゃないかと思ってたけれど…」
暦
「……バカ言うなよ…僕は羽川に恋しちゃってねえよ」
忍野
「…そうかい…」
暦
「そうだよ…」
忍野
「…っははぁ…阿良々木くんがいいならそれでいいよ
まぁ…聞いてはみたものの…阿良々木くんの気持ちより
委員長ちゃんの気持ちが1番大事だからねぇ…
障り猫が何をしたところで…阿良々木くんが何をしたところで…
人は一人で勝手に助かるだけなんだし…さ…」
暦
「それに…羽川は助けなんて求めてないし…な…
僕に求めてくれちゃっても良かったのに…」
忍野
「案外求めてたのかもしれないけどねぇ…」

暦
「はぁ？」
忍野
「『助けて』って言わなきゃ…
助けを求めた事にならない訳でも無いだろ…
『好き』って言わなきゃ好きって事にならない訳でもない様に
軽はずみに言えない言葉は誰にだってあるよね…阿良々木くん」

023

私達は学校へ向かう…
心做しか阿良々木さんの顔が晴れやかである…
吹っ切れたような…でもどこか…後悔しているような…

楓
「なんかスッキリした顔してますね」
暦
「そうか？」
楓
「えぇ…」
きっと…彼女（羽川翼）の事だろう…
彼女への思いに答えを得たのだろう

楓
「学校到着！まだ１０分余裕ある…」
暦
「…ちょっと急ごう」
楓
「はい！」

私達は教室へ向かう…

きっと私も…悩む時が来るだろう…
彼のように…はっきり答えは出せないかもしれないけど…

私も…いつか…ワタシのコタエを…見つけよう…

そんなこんなで私の転校初日から始まった奇妙な縁は
広がっていくだろう…

私達は階段をのぼる

ひたぎエンカウンター
ひたぎエンカウンター　其ノ壱

００１

これは、私の大切な友人との出会いの話である…

…まぁ…彼女との出会いは…
エンカウントって言った方が良さそうだったけど…

まぁ…結局…彼女と出会ったからこそ…
私はのちに成長出来たのだから…
意味はあったのだろうか…

あのエンカウントには…きっと…

００２

楓
「…転校初日も思ったけど…この階段…長くない？」
暦
「それは僕も常々思う…」

遅刻までには、まだ余裕はあるけど…
…長いわ…
楓？
『小僧、上だ』

暦
「え？…うおっ!?おお？」
少し困惑している阿良々木さん
楓
「…人が…落ちてきた…」

００３

放課後…

楓
「…あ、そうだ…私、忍野さんところ寄るから…」
暦
「…あー…そうだ、委員の仕事終わり次第迎えに行く」
楓
「…すいません…ありがとうございます…」
暦
「…道分かるか？」
楓
「流石にね…火憐ちゃんがこの辺の道は教えてくれたから」
暦
「あのフル・マラソンついてったのか!?」
楓
「いや、流石に…歩いたよ…」
…フル・マラソン……しようとしてたけどね…
暦
「…そうか…とりあえず…気を付けてな？」
楓

「…あぁ…うん…」

私は教室を出た

００４

？

「はじめまして…いや、今朝ぶり…とでも言っておくべきかしら？」

楓

「あ、朝の」

落ちてきた人だ

楓？

『避けろ！』

今回は直接脳内に!?

楓

「はぇ!?」

咄嗟に動いてしまった…距離を置いてしま…え？

？

「あら…避けられた…」

楓

「…えぇ…」

元々私の首筋が有ったであろう位置にカッターが向けられていた

？
「…驚いたわ…まさか避けられるなんて」
楓
「…私なにかしましたっけ？」
？
「あぁ…いえ、貴女は何もしてないわ…
でも、知られると面倒だから…」

楓
「……なるほど…あの時の阿良々木さんの顔と今の発言で
大体察した…」
？
「…なら…生かしてはおけないわね」

彼女は…制服の袖から出てきた様々な文房具を構えた

楓
「物騒すぎる！」

？
『小娘、変われ…この場は私が』
楓
「あぁ！もう！話しかけてる暇あるなら力貸しなさいよ！」

？
『むっ…』

？
「何の話？」
楓
「…こっちの話！」

？
「!?」
私は既に彼女の頭上を超え後ろに回っていた
楓
「てったーい！」
そのままの勢いで昇降口まで逃げたのであった

００５

楓
「…てなことがあったんです…」
忍野
「…それは…災難だったね…」
楓
「…あの時…麟が…こいつが知らせてくれなかったら…
私…死んでたかもと思うと…」
忍野
「麟？」
楓
「…あぁ…えっと…私…獣憑きなんです…
要は…怪異に憑かれてるんです」
忍野
「…あぁ…そうなのか…やっぱり…」
楓
「…私の家の事…知ってるんですよね？」
忍野
「まぁ…知ってるね…」
楓

「…麟について…何か知りませんか？」
忍野
「……さぁ？皆目見当もつかないよ」
楓
「…そう…ですか…」
忍野
「…でも……おや？阿良々木くんが来たようだ」
窓の外を見ていた忍野さん

楓
「あー…お迎え頼みましたから…」
忍野
「そうなのかい？…の割には…女の子連れてるけど…」
楓
「え？」
忍野
「長い髪の女の子」
楓
「…あー…多分さっき話してた子です」
忍野
「…ほう…」

忍野さん…顔がお仕事モードになってる…

ひたぎエンカウンター　其ノ弐

００６

？

「…なんであなたがここ？」

楓

「…あー…多分あなたと似たような事で」

暦

「篠宮…それは…」

楓

「…近いうちに話すよ…阿良々木くんには」

？

「…で…私はどうすれば？」

忍野

「君、重さがないんでしょ？」

暦

「!?」

？

「…なぜそれを？」

忍野

「いやぁ…そんな睨まないでよ…
転校生ちゃんから体重が無いかもしれない
って言われててね」

？

「…あなた…」

キッと睨む

暦

「戦場ヶ原、結局は話す事だったんだから
手間が省けてよかっただろ…」

戦場ヶ原

「……それもそうね…」

忍野
「…ま、とりあえずおおよそ検討はついてるから…
というか…」
楓
「見えたから…伝えといた…」
暦
「見え…た…？」
忍野
「重さ…そして…蟹…
これらから推測できる怪異は…
重し蟹…神様だ」
戦場ヶ原
「…神様……」
忍野
「とは言っても、宗教があるタイプの神様じゃないからね
今日中には何とか出来るけど…どうする？」
暦
「…早いに越したことはないよな、戦場ヶ原？」
戦場ヶ原
「…私はまだ…貴女達を信用した訳では無いわ…」
楓
「……そうだよね…怪しさ満点だよね…」
忍野
「僕はそんなに怪しくないだろ」
楓
「…トップオブ不審者…」
忍野
「ヒドイなぁ…」
楓

「…私が信用出来ないなら
私がここから居なくなればいいのかな？」
戦場ヶ原
「…いくつか…聞きたい事がある」
楓
「どうぞ」
戦場ヶ原
「…貴女は何者？」
楓
「…アナタが蟹に行き遭った少女なら…
…獣と噛み合った少女…かな…」
戦場ヶ原
「…詩的表現かしら？」
楓
「事実を述べただけだよ」
戦場ヶ原
「…そう……
今回だけ…信用してあげるわ…
私は何をすればいいかしら？」
忍野
「…まぁ、相手は神様だからね…
体を清めてくるといいよ…
こっちはこっちで用意するから」
戦場ヶ原
「…はい…」

００７

夜

忍野

「…やっぱり本職の人間が着ると様になるねぇ…」

楓

「…私が手伝うようなことあります？」

巫女装束に身を包んだ篠宮

忍野

「…もうあらかた用意し終わったからね…

…可能なら阿良々木くん達が来て

…色々始まったら…結界張れるかな？」

楓

「…まぁ…あまり長くは持ちませんけど…」

忍野

「…ＯＫ…張れるだけ十分だ…さて…来たね」

戦場ヶ原

「お待たせしました……２人とも…神職の方だったの？」

忍野

「いや、僕は違うよ？」

楓

「私は…次期ね…」

暦

「…馬子にも衣装って奴か、忍野」

忍野

「だってさ、転校生ちゃん」

楓

「…傷付きました…」

戦場ヶ原

「最低ね…阿良々木くん」

暦

「あれ!?忍野に向けて言ったのに
変な事になってる!?」

忍野
「…とまぁ、ふざけてないで始めようか」

ひたぎエンカウンター　其ノ参

００８

…後日談というか…今回のオチ…

結局朝になった…

楓

「…静かになったし…もう大丈夫かな？」

忍野

「転校生ちゃん、もう大丈夫だよ」

楓

「はい」

私は廃教室に入り直す…

楓

「……えぇ…？」

壁が凹んでいた…

そして、戦場ヶ原さんが蟹に土下座していた

忍野

「…っと…」

蟹の上に置いていた忍野の足が沈み込む…

忍野

「別に、悪いことじゃないんだけどねぇ…

立ち向かえば偉いというわけじゃない…

逃げたきゃ逃げれば良いのさ…

でも…君がこういう形を望むのなら

それが今の

君の『想い』なんだろう…」

００９

これは後日、忍野さんから聞いた話だけど

あの蟹は、戦場ヶ原さんと母親との繋がりを切り
その代わりに重さを…想いを取った、とのこと

戦場ヶ原
「あなたにも謝なくちゃいけないわよね」
楓
「阿良々木君とは違ってダメージ受けてないし
気にしなくて良いよ？」

驚いた…普通に謝ろうとしてきた…

戦場ヶ原
「……」

楓
「阿良々木君同様、これからは友達として…
よろしくね…ひたぎちゃん」
戦場ヶ原
「え、ええ…」

あれ？一気に距離詰めすぎたかな…

楓
「…？」
戦場ヶ原
「大丈夫、なんでもない…」
楓
「あー…いきなり下の名前はダメか…」
戦場ヶ原
「そんな事は無い、大丈夫よ」
楓
「うーん…皆が呼ぶようになるまでは
苗字で呼ぶよ」
戦場ヶ原
「そう…」
楓
「じゃあ、改めて、よろしくね
戦場ヶ原さん！」
戦場ヶ原
「えぇ、よろしく…篠宮さん」
楓
「えへへ、友達増えたぁ～」

私今凄い顔してそう…

戦場ヶ原
「…あの、篠宮さん…」
楓
「ん？なに？」

戦場ヶ原
「…篠宮さんって阿良々木君と付き合ってたりするのかしら？」

不意に彼女はそんな話を振ってきた

楓
「彼は独り身だよ？」
戦場ヶ原
「じゃあ、送り迎えって言うのは…」
楓
「引越し先がお隣でした」
戦場ヶ原
「なるほど…」

…これで彼女の疑問は解消されたかな？

楓
「……」

戦場ヶ原
「…勘違いしないで」
楓
「…うん、分かってるよ…疑問を解消したかったんでしょ？」
戦場ヶ原
「ええ…」

彼女なら…きっと…

楓
「…彼はきっと、誰にでも優しいから…だから…」
戦場ヶ原
「…」
楓

「…だから…もし、何かあったら…阿良々木君を…
…よろしくね…」

…私今…凄い顔してるな…

０１０

戦場ヶ原
「……えぇ…」

楓
「さて…私は忍野さんの所に寄るからここらでお別れだ」
戦場ヶ原
「えぇ…また明日」
楓
「うん、また明日！」

楓
「…戦場ヶ原は大丈夫そうね…
羽川さんとは違って…ちゃんと祓えたみたいだし」

…私とも違ってね…

『…良かったな』

011

楓
「最近よく…喋るわね…」
私は携帯を構える…
これで多少は誤魔化せる…
『…この街は不快でな…寝れやしない』

楓
「あっそ…」
『…お前は…儂が憎いか？』

楓
「……」
『…まぁ、憎いだろうな…』

楓
「…」
『儂が居なければ、お前は…』

楓
「感謝してるよ…麟…」

麟
『……』

楓

「…阿良々木君や戦場ヶ原さんと会えたのは
あなたのおかげ…今はそう思ってる」

麟

『だが…そのせいでお前は』

楓

「不運な目に遭う…でも仕方ないでしょ…
なにせ…

神様であるあなたを私が食べたのだから」

まよいキャリー
まよいキャリー　其ノ壱

００１

正直この話をするかどうか悩んだ

でも、私の話をするなら…この話も必要

蝸牛と会い、道に迷ったあの時間も

今の私を形作るモノ…思い出だから

だから話すよ…蝸牛の少女と出会ったあの日の話

００２

楓

「やっと来た…」

『モノがモノだからちょっと手間取ったけど

時期的にはそろそろ地図が頭に入った頃だろうから

丁度良かったかな？

父より』

バイクである

中型のバイクである

００３

楓

「～～～♪」

鼻歌交じりのツーリングを楽しんでいる

とても気分がいい…

阿良々木君探しという頼まれ事がなければ

楓

「…っと、この辺で１度…えっと近くの公園は…っと

ここを右折で目の前か…あれ？」

すごく見覚えのある自転車が止まってる

とりあえず隣に停めて…

あれ？

楓

「…あれ？戦場ヶ原さんも居る…」

とりあえず…阿良々木君達のとこに…

楓

「…ん？」

なんだろ…この違和感

００４

暦
「なんでバイク!?」
楓
「免許持ってるし…昨日届いたから
慣らしがてらね」

戦場ヶ原
「…おっきい…」
楓
「ん?」
戦場ヶ原
「…いや、なんでもない…」
楓
「…?」
暦
「あ、そうだ戦場ヶ原、お礼なら篠宮に」
楓
「…ん?」
戦場ヶ原
「……」
不意をつかれたような顔をしてる…

楓
「あー…お礼なら既にして貰ったよ?」
暦
「何!?」
楓
「まぁ、教えないけどね」
戦場ヶ原
「という訳だから阿良々木君にもお礼がしたいのよ」
暦

「お前ら裏で結託してないか…」

００５

戦場ヶ原

「なんでもしてあげる」

楓

「…だってさ」

暦

「と言われてもな…」

戦場ヶ原

「1週間ノーパン生活でも構わないわ」

暦

「へ？」

戦場ヶ原

「裸エプロンで毎朝起こして欲しいとか」

暦

「うちの家庭が崩壊するわ！」

楓

「流石に私もお隣さんちの家庭崩壊の原因が友達なのは…

ちょっと…」

戦場ヶ原

「…そう…じゃあ、エロは無しね」

暦

「おう、そうしてくれ…」

戦場ヶ原

「まぁ、阿良々木君はそういうお願いは

してこないと思ってたけど」

暦

「お？僕、信頼されて…」

戦場ヶ原

「だって童貞だし」

００６

暦
「ど、ど、ど、童貞ちゃうわ！」

…模範解答みたいなリアクションしてるな阿良々木君…

暦
「そ、そういうお前は経験あんのか！」
戦場ヶ原
「ヤリまくりよ」
暦
「……！」
楓
「アラァ…」

朝っぱらから公園でなんちゅう会話してんだこの人たち…

戦場ヶ原
「…」ポヒュー

戦場ヶ原さん…口笛吹いてるんだろうけど…吹けてない…
ド緊張して唇乾いてる…
暦
「…戦場ヶ原、お前…」
戦場ヶ原
「何かしら？」
暦
「嘘ついてるだろ？」

戦場ヶ原
「なんの事かしら？」
暦
「僕にその情報を開示したところでお前に何の得もない…」
楓
「…素直に答えといた方が今後のためだと思うよ…私は…」

戦場ヶ原
「……
えーそうですよ！処女ですよ！」
楓
「逆ギレだ…」
戦場ヶ原
「所詮、阿良々木君の事を好きになる子なんて
私みたいなメルヘン処女だけよ！」
暦
「……」

愕然としちゃってるよ…阿良々木君…

楓
「…話振られなくてよかった…」
戦場ヶ原
「楓さん」
楓
「ｏｈ……」
戦場ヶ原
「あなたも言いなさぁい！」
楓
「ひゃぁ！」

暦
「……ここ五分ぐらいの記憶消えないかな…」

００７

戦場ヶ原
「…ふう…」
楓
「…うぅ…」グスッ

暦
「…お疲れ様…」
戦場ヶ原
「…で、お願いは決まったかしら？」
暦
「半日考えさせてくれ、夕方までには答える」
戦場ヶ原
「という名目で公園デートと洒落込むのね」
楓
「なかなかやり手だね、阿良々木君」
暦
「…お前ら仲良いな……ん？」
楓
「おん？」
戦場ヶ原
「……？」

阿良々木君が公園の入口の方を見ている…

そこには…１０歳前後の女の子が居た

まよいキャリー　其ノ弐

００８

暦

「…さっきも…迷子か？」

戦場ヶ原

「……どの子？」

暦

「いや、ほら、あの地図の前にいる子」

戦場ヶ原

「…その子がどうしたの？」

暦

「いや、戦場ヶ原が来る前にもあそこに居たんだよ」

楓

「…可愛い子には旅をさせなさい…」

暦

「え？」

楓

「…頑張って１人でどこか行こうとしてるんだろう…
もう少し１人で頑張らせてあげよう…」

暦

「そ、そうか？」

楓

「…そうだよ…一人で頑張ってるんだから
手助けはしちゃダメだよ…阿良々木君」

暦

「…わ、わかった…」

００９

戦場ヶ原
「…見蕩れるの「蕩れ」って凄い言葉よね」
楓
「蕩れ？」
戦場ヶ原
「知ってる？草冠に湯って書くのよ」
暦
「あぁ…一応知ってる」
戦場ヶ原
「私の中では草冠に明るいの「萌（もえ）」の
更に一段上を行く次世代を担うセンシティブな言葉として
期待が集まっているわ
「メイド蕩れ」とか「猫耳蕩れ」とか」

暦
「…蕩れ…ね…」
戦場ヶ原
「戦場ヶ原様、蕩れ…って言っていいわよ、阿良々木君」
暦
「言わねぇよ！」
楓
「…それじゃあ、ほぼ告白だものね…」
戦場ヶ原
「あ、お願いは彼女が欲しいでも構わないわ」
暦
「…ちなみにそう願うと？」
戦場ヶ原
「彼女が出来ます」

戦場ヶ原さん…阿良々木君鈍いから
もっとハッキリ言わないと…

０１０

楓
「…悩み事の解決手伝ってもらったりでも良いんじゃない？」
戦場ヶ原
「…まぁ…構わないわ…」

ごめん、戦場ヶ原さん…
悪いとは思ってる…だから睨まないで…

暦
「…悩み事がない訳でもないが…
兄妹喧嘩だし……」
戦場ヶ原
「…私には解決出来ないわ」
楓
「即決だァ…」
戦場ヶ原
「まぁ、切り捨てるのも可哀想だから
話だけでも聞いてあげる」
暦
「…今日、母の日だろ…その事で喧嘩した」
戦場ヶ原
「…出来のいい妹たちが居るから
出来の悪い兄は居場所が無いのね」
暦
「辛辣だな！…その通りだけど…」
楓

「認めちゃったよ…」
暦
「だから今日は…帰りたくないんだ…」
楓
「……そう…」
暦
「…その点、一人暮らしの篠宮は楽だよな…」
楓
「…感謝できる母親が居るだけマシだよ」
暦
「!?」
楓
「…忘れて……あ、またあの子」
暦
「あ、あぁ…」
楓
「…行ってあげていいんじゃないかな、そろそろ…」
戦場ヶ原
「……」
暦
「わかった、話しかけて来るよ」

011

暦
「すごい断られ方した…」
楓
「そう…」

暦
「…もう一回言ってくる」
戦場ヶ原
「…いってらっしゃい」

０１２
楓
「…戦場ヶ原さん、何が見える？」
戦場ヶ原
「…女の子…」
楓
「嘘つかなくていいよ」

戦場ヶ原
「高クオリティのパントマイムプロレス」
楓
「…それで合ってるよ」
戦場ヶ原
「…そう…」
楓
「私も透けて見える程度だもん」
戦場ヶ原
「…そう」
楓
「だから…安心して」
戦場ヶ原
「…わかったわ」

013

楓

「…＿阿良々木君…小さい子にバックドロップは…
ちょっと…」

暦

「いや…その……はい」

楓

「…目的地は聞き出せた？」

暦

「……」

楓

「…起きるまで待とうか」

014

？

「ううん……」

楓

「思ったより早かった」

足がしびれる前で良かったよ…
しびれるかどうかは置いといて…

？

「夢を見ていました…

凶悪な高校生に虐待される夢と
とても柔らかいものに身を委ねて寝る夢を…」
楓
「果たして夢だったのだろうか…」

？
「ハッ！」
楓
「まぁ、君にバックドロップかました彼はお友達の凍てつく視線を
絶賛食らってる最中だから」
？
「…話しかけないでください…あなたのことが嫌いです」
楓
「…つらいよね…行きたい所に
どれだけ経とうとも決してたどり着けないのは…」
？
「!?」
楓
「安心して良いよ…なんとかなるよ…」
？
「…無理ですよ…」
楓
「無理かどうか決めるのはこれからだよ…
さて…二人とも…彼女、目を覚ましたよ」

まよいキャリー　其ノ参

０１５

楓
「…さて…阿良々木くん…
こんなタイミングで言うのもなんだけど…
携帯の充電が切れて地図が開けなくなっちゃった…」
暦
「…タイミングが悪すぎる！」
楓
「…マジでごめん…阿良々木くん探しの時にＧＰＳ起動してて
切るの忘れてたみたい…」
暦
「…ふらっと来たからこの辺土地勘ないぞ…」

戦場ヶ原
「…昔、この辺に住んでたわ…私」
暦
「本当か！じゃあこの住所分かるか？」

住所の書かれた紙を差し出す、阿良々木くん

戦場ヶ原
「読み上げなさいよ」
暦
「いや…見た方が早いだろ？」
戦場ヶ原
「あなたの触れた物に触りたくないの」

暦
「…僕なんかしたか!?」

渋々、住所を読み上げていく阿良々木くん

戦場ヶ原
「…ふむ…あの辺ね」

どうやら脳内マップで大体の位置は把握したらしい

０１６

戦場ヶ原
「……通り過ぎた…」

立ち止まり戦場ヶ原さんが言う

暦
「戦場ヶ原…これで３度目だぞ？」

戦場ヶ原
「…誠意が見たいなら全裸土下座してあげるわ」

暦
「僕を社会的に殺す気かァ！」

やっぱり…そう簡単にはいかないか…

楓

「…んー…一旦公園に戻って考えようか…」

暦

「そうするか」

？

「だから言ったじゃないですか…無理ですって…」

顔を下げつぶやく

楓

「まだまだ、これからだよ…八九寺真宵ちゃん」

真宵

「なんで私の名前を!?」

楓

「カバンにガッツリ書いてあるよ…」

天然かな？

０１７

暦

「…戦場ヶ原、大丈夫か？」

戦場ヶ原

「心配ないわ…阿良々木くん」

楓
「…よし、忍野さんの所行くか」
暦
「なんでだ？」
楓
「道に迷わす怪異の対策を聞きにね」
暦
「な!?」
戦場ヶ原
「…」
暦
「だから土地勘のある戦場ヶ原が迷ったりしたのか」
楓
「…まぁ…そうだね」
暦
「…なんか、歯切れ悪いな」
楓
「…とりあえず…戦場ヶ原さん、
阿良々木くんの自転車で忍野さんの所に行ってきて
迷い牛って言えば伝わる筈だから」
戦場ヶ原
「わかったわ…」

０１８

暦
「…八九寺…」
真宵
「気にしないでください…もう慣れてますから」
楓
「なんで諦めムードなんだい？」

暦
「いや…」
楓
「まぁ、なんとかなるよ」
暦
「え？」

羽川
「あれ？阿良々木くん？」
楓
「…」
羽川
「それに篠宮さんも、一緒にお出かけ？」
楓
「いや、妹さん達に頼まれて家出した
阿良々木くんの捜索してた」
暦
「羽川は…散歩か？」
羽川
「うん、そうだよ…っとそこの子は？」
真宵
「話しかけないで下さい、貴女のことが嫌いです」
羽川
「おや、初対面の子に嫌われちゃった…
私意外と子供受けはいいんだけどな…
でもダメだよ！ちゃんと挨拶しなきゃ！」
真宵
「は、はい…」
羽川
「よろしい…」
暦

「羽川はすごいな…」
羽川
「それと阿良々木くんもちゃんとそういう事は
言わなきゃダメだよ？」
暦
「はい…」
羽川
「それから篠宮さん」
楓
「私もか！」
羽川
「あまり学区内を走らない方がいいよ」
楓
「…そうだね…校則上ダメだもんね」
羽川
「まぁ…転校前に取ってる資格だし
あまり問題にはならないと思うけどね」
暦
「あ、そうだ羽川」
羽川
「なに？」
暦
「この住所わかるか？」

真宵ちゃんのメモを差し出す阿良々木くん

羽川
「あ、この住所なら……
…ごめん、分からないや」
暦
「羽川でも知らない事ってあるんだな…」

羽川
「…なんでもは知らないわよ、知ってることだけ」
暦
「……」
羽川
「…さて…私もそろそろ散歩の続きに行こうかな
…そうだ、阿良々木くん」
暦
「ん？」
羽川
「…あまり戦場ヶ原さんに気を使わせちゃダメだよ？」
暦
「お、おう？」
羽川
「じゃあね、阿良々木くん、篠宮さん」
暦
「あぁ」
楓
「…乗り物…
…あとは阿良々木くんの交友関係か」
暦
「ん？」
プルプルプル
暦
「…俺の携帯か」

019

忍野
「へー…これ阿良々木くんから見えてるの？」
戦場ヶ原
「ええ」
忍野
「じゃあとりあえず転校生ちゃんからの言伝で
対象はわかったから説明するよ

迷い牛
まぁざっくり言えば永遠にゴールに辿り着けなくする
怪異だ、だから棄権すれば開放される」
暦
「…いや、忍野、僕が聞きたいのはコイツを送り届ける」
忍野
「何かそこにいるのかい？」
暦
「…いや…何言ってるんだよ忍野…ここに」
忍野
「…あー…そういうことね」
楓
「…」
暦
「え？」
忍野
「とりあえず、対処法はツンデレちゃんに教えとくから
答え合わせしてね、転校生ちゃん」
楓
「…本当…鋭い人…」
忍野

「それと最後に阿良々木くん」
暦
「ん？」
忍野
「自分の目で見た物が全て真実だと思うなよ」

０２０

戦場ヶ原
「…戻ったわ」
暦
「おかえり、戦場ヶ原…」
戦場ヶ原
「楓さん…貴女知ってて聞かせに行ったの？」
楓
「…確信が持てなくて…」
戦場ヶ原
「…そう…」
楓
「…忍野さんはなんて言ってた？」
戦場ヶ原
「…『阿良々木くん、帰りたいと思えば怪異から解放される』って言ってたわ…」
楓
「…そのまんまだね」
暦
「…いや、だから僕が聞きたいのは！」
戦場ヶ原

「…そこに誰かいるの？」
暦
「いや、戦場ヶ原、なにふざけてるんだよ」
戦場ヶ原
「阿良々木くん、申し訳ないけど…
私には見えないの…八九寺真宵なんて女の子は」
暦
「…いや、こうしてここに居るし、触れるし
喋れる…何言ってんだよ戦場ヶ原…なぁ、篠宮」
楓
「私には見えるよ」
暦
「ほら！」
楓
「私の中に怪異が居るから」
暦
「!?」
楓
「ちなみに、羽川さんが見えてたのは
そもそも彼女が家に帰る意思が無かったから
事情はよく分からないけど…
迷い牛は…帰りたくない人を永遠に迷わす怪異」
暦
「でもこいつは！」
楓
「…君、何年か前に死んでるでしょ？八九寺真宵…
さんと呼ぶべきかな？」
真宵

「…」
暦
「いや、ふざけるなよ！」
楓
「巫山戯てる訳ないだろうが！」
暦
「ッ!?」
楓
「こっちがどんだけ
気を使ってたと思ってやがる！」
暦
「…」
楓
「テメェの見てるモンが真実じゃねぇんだよ！
八九寺真宵はとうの昔に死んでて
そこには居ないんだよ！」
暦
「…そんな」
楓
「…阿良々木、お前の目は何が見えてる」
暦
「……」
楓
「…私の目には八九寺真宵の顔は見えないんだよ」
暦
「…泣いてる……僕は…
八九寺真宵がお化けだろうがなんだろうが
コイツを送り届ける…」
楓
「なんの意味があるの？」
暦

「意味なんてない…ただ…
帰るべき場所に帰してやりたいだけだ！」
楓
「帰るべき場所？あの世以外に何がある！」
暦
「…家だって…帰るべき場所だろ」
楓
「…！」
暦
「だから僕はこいつを送り届ける！」
楓
「…そう…戦場ヶ原さん、忍野さんの事だから
阿良々木用の回答があるんでしょ？」

戦場ヶ原
「…ええ…録画してあるわ」

『…どうせ阿良々木くんの事だから
どうやっても助けたいとかって言ってるだろうから…
裏技を教えよう…ただし1度っきりの特別な手段だ
請求は転校生ちゃんに5万で』

楓
「…んえ？」
戦場ヶ原
「という訳で、とっておき、聞いてきたわ」
楓

「…今度払いに行かなきゃか…」
真宵
「無理ですよ！１０年辿り着けなかったんですよ!?」
暦
「…１０年…」
戦場ヶ原
「…それが八九寺さんの迷い続けた年月かしら？」
暦
「あぁ…うん…」
戦場ヶ原
「…なら、問題ないわ１、２年だったら逆に過酷だったわ」
楓
「…じゃあ…合ってたのね…あれで…」
戦場ヶ原
「やっぱり貴女…」
楓
「…ズルかと思って確信が持てなかった…ごめん…」
戦場ヶ原
「…いいわ、忍野さんも自分を頼ってくれた事を喜んでたわ
一歩間違えたら永遠に迷い続ける羽目になってたとか…」
楓
「…今度、勉強させてもらおう…」
暦
「…じゃあ教えてくれ戦場ヶ原！」
戦場ヶ原
「道を歩かなければいい…少なくとも迷い牛が知っている道を
つまりココ最近出来た道や、塀の上なんかを辿れば
ゴールに行ける」
真宵
「!?」
暦

「いや、塀の上とかはわかるけど
なんで新しい道は平気なんだ？」
楓
「…怪異が幽霊のようなものだった場合…
怪異自体には蓄積された記憶や経験は
…無いの
そこにあるのは思いだけだから…」

０２１

戦場ヶ原
「…ひとつ。確認したい事がある…阿良々木くん」
暦
「は、はい」
戦場ヶ原
「…阿良々木くんは誰だろうと救う人だから…
私だから助けてくれた訳じゃない…そうでしょ？」
暦
「…僕は…そんなつもりは…」
戦場ヶ原
「別に助けを求めて無くても…困ってる人に手を伸ばす…
そんな人だから…私は惚れた」
暦
「…え？」
戦場ヶ原
「…スッキリしたわ…悩みが無くなった…篠宮さん」

楓
「ん？」
戦場ヶ原
「証人になってもらえるかしら？」
楓
「…ＯＫ」
戦場ヶ原
「阿良々木くん」
暦
「はい…」
戦場ヶ原
「Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ」
暦
「!?」
楓
「…ワヲ…」
真宵
「おめでとうございます」

まよいキャリー　其ノ肆

０２２
戦場ヶ原
「…ここね」
大体五分ぐらいの道のりを
一時間かけた…
暦
「…アリかよ…こんなのって」
そこは何もない更地だった
戦場ヶ原
「区間整備…考えてみれば
これだけ町並みが変わっているのに
目的地だけが何も変わってないなんて
…そんな都合の良いことがあるわけ無い」
暦
「そりゃ…そりゃあさ…
これは予測できたこと…だったかもしれないが
…都合よくいって良いところじゃねぇのかよ」
楓
「…羽川さんの反応的にそんな気はしてたけど…」
暦
「こんなの…」
真宵

「う…あ…あ…」

不意に更地に走り出す八九寺

暦

「八九寺！」

真宵

「ただいま帰りました！」

楓・暦

「！」

私の目には抱き合う親子の姿が見えた

楓

「…良かったね…真宵ちゃん」

私は泣いていた…涙なんて

…もう出ないと思ってたのに

戦場ヶ原

「彼女…何か言ってたの？」

暦

「うん…ただいまって」

戦場ヶ原

「そう…なんだかそれは

とてもいい話のように思えるわ」

023

楓
「さて、真宵ちゃんも送り届けたし
私達も帰ろうか」
戦場ヶ原
「ちょっと待ってもらえるかしら」
楓
「え？」
戦場ヶ原
「阿良々木君、まだ返事聞いてないんだけど」
暦
「え？あぁ…」

戦場ヶ原
「私、結構欲深いの」
暦
「じゃあ…一つ約束してくれ」
戦場ヶ原
「何かしら？」
暦
「今後は僕と認識にズレがあったら
はっきり言ってくれ」
戦場ヶ原
「お安いご用よ…で、阿良々木君…
一応言葉にしてもらえるかしら？」
暦

「篠宮、悪いが僕の方も証人に」
楓
「はなからそのつもり」
暦
「ありがとう」
楓
「ほら、女の子をあんまり待たせないの」
暦
「……流行ると良いな」
戦場ヶ原
「は？」
暦
「戦場ヶ原、蕩れ」

戦場ヶ原さんは笑顔だった
…とんだ凸凹カップルな気もするけど

０２４

後日談…というか今回のオチ
あれから一週間
私が個人的に気になって色々調べたが

八九寺真宵の身に起こった悲劇と
あの土地に綱手さんという人が住んでたことしか
解らなかった…

羽川さんに聞けば解るんだろうけど
多分…知らない方が幸せな気がする

そんなことより

楓
「何で君がここにいるんだ？」
真宵
「えへへ」
暦
「なんか二階級特進だとか」
楓
「…ええ」

そういうこともあるの？
あり得るの？

真宵
「まぁ…しばらくこの町にいますんで
見かけたら声をかけてください！」

楓
「…うん」
暦
「あぁ」
真宵

「では、私はこのへんで！」

楓
「ふう…にしても有事の際を除き
走行禁止か…」
暦
「後ろに乗るか？」
楓
「…それは…戦場ヶ原さんに
許可取ってからにするわ」
暦
「そうか…」
ダダダダダダ
楓
「んえ？」

？
「やっと追いついたぞ
阿良々木先輩！」

するがハンド
するがハンド　其ノ壱

００１
この話は…私と彼女の出会いである
強いて言うならこの時に本性に
気づければよかったと少し思ってる

…でも後悔はない…私は最善を尽くしたのだから

００２
？
「やっと追いついたぞ
阿良々木先輩！」
暦
「…マジで何なんだよ…神原駿河…」
楓
「神原…駿河……ん？」
なんか引っかかる…聞き覚えが…
神原…かんばる…んー…ダメだ…思い出せん…

暦
「１つ下の後輩の神原駿河
直江津高校バスケ部を全国に連れてった
天才バスケットプレイヤーだ」
楓
「…あぁ！思い出した校内新聞だ！」

確か…腕を怪我して無念の引退って書いてあった…
…ん？あれ？全力疾走してこなかった？

神原
「…こちらの女性は？」
楓
「あ、阿良々木くんのクラスメイトの
篠宮楓です」
神原
「篠宮先輩」
暦
「で、何の用だ？」
神原
「あぁ…日本の今後について
阿良々木先輩の意見を聞こうと思ってな」
楓
「阿良々木君は…そういう難しい事は考えないんじゃ…」
神原
「なんと！つまり阿良々木先輩は世界を見ているのか！」
暦
「なんでそうなる！」
楓
「…っと、阿良々木君、時間大丈夫？」
暦
「……後ろ乗せてくれ」
楓
「了解」
神原
「ん？この後なにか用事でも？」
暦
「あぁ、クラスの中で頭のイイ奴に

勉強教えてもらう約束しててな…遅刻厳禁だと…」
神原
「んー…あぁ！戦場ヶ原先輩か！」
暦
「お、おう…よく分かったな」
神原
「阿良々木先輩のクラスで頭のいい人と言えば
戦場ヶ原先輩だろう！…っと足止めしてはいけないな！
では、阿良々木先輩…ご武運を！」
暦
「……嵐みたいな奴だな…本当に…」
篠宮
「……阿良々木君、一応迎えにも行くね」

003

戦場ヶ原家前
楓
「時間ギリギリ！」
暦
「ありがとな！これで殺されずに済む！」
楓
「メットは帰りも使うからそのまま行って」
暦
「あぁ！」

ピロン

楓
『もしもし？』
戦場ヶ原
『上がってく？』
楓
『いや、大丈夫よ』
戦場ヶ原
『そう…じゃあ、帰りもよろしくね篠宮さん』
楓
『分かった』
プツッ
楓
「さて…」

004

楓
「……隠れてないで出てきたらどうだい？神原さん」
神原
「…何故…」
楓
「私…鼻が利くんだよね…」
神原
「…この事は誰にも…」
楓
「……その腕折れてないんでしょ？」

神原
「!?」
楓
「…ま、君が何を願ったかは聞かないでおくよ…
ただ1つ言っておくなら…君の願いは叶わない…かな?」
神原
「何を根拠に!」
楓
「さぁ?何を願ったから知らないから適当さ」
神原
「私をおちょくってるのか!」
楓
「んにゃ?君の言動と行動、でもってその対象周辺の
近況の変化から推測しただけ…
にしても随分と声を荒らげるね…君…
抑え込むのにも必死なんでしょ?」
神原
「…貴女は…一体…」
楓
「ただの一般人だよ」

005
ピロン
楓
『…ごめん、戦場ヶ原さん…パンクした…』

戦場ヶ原

『阿良々木君には歩いて帰るように伝えておくわ』

楓

『ホントごめん…』

ごめんね、阿良々木君

するがハンド　其ノ弐

００６

夜

ピロン

戦場ヶ原

『阿良々木君帰ってるかしら？』

楓

『…いやまだみたいだね』

戦場ヶ原

『…何かあったのかしら』

楓

『…分からないな…ごめんね…』

戦場ヶ原

『…まぁ…阿良々木君だし大丈夫よね』

楓

『一応家周辺見回ってみたら？』

戦場ヶ原

『…そうね、野垂れ死なれてても困るわね』

楓

『…彼氏…だよね？』

００７

翌日

昼休み

暦

「篠宮、今日暇か？」

楓
「…パンク修理…は明日にするわ…」
暦
「悪いな…」

2年の教室

暦
「…神原駿河いるか？」
神原
「ここに！」
暦
「ちょっと…こっちに」

神原
「何用かな？阿良々木先輩！」
暦
「昨日の事だ」
神原
「あぁ！日本の今後について！」
暦
「違う、昨日の夜の事だ」
神原
「……」
楓
「…結局襲ったのね」
神原
「違う！あれは…」
暦

「…神原…」
神原
「私は…私は！」
楓
「……」
私は神原駿河を抱きしめた
楓
「落ち着いて…誰もあなたを責めるつもりはない」
神原
「…っ！」
楓
「詳しく聞かせてくれるかしら？」
神原
「…ここでは…人が多い…私の家に案内する」
暦
「…僕出番ないな」
楓
「…多分１番の大役があるよ」

００８

神原家…
楓
「家、っていうか邸…」
神原組とかかかってそう…
暦
「…広っ…」

神原
「阿良々木先輩の家程ではないぞ」
暦
「僕の家はこんなに広くねぇよ！」
楓
「ウチと阿良々木家を足しても足りなさそう…」
神原
「ささ、入ってくれ！」

部屋に通された…
部屋？
ゴミ…いや、本に埋もれてる…
暦
「…神原…」
神原
「なんだ？阿良々木先輩？」
暦
「掃除させろ！」

００９

楓
「あれが…こうなるか…」

綺麗になった…畳の床が見えるようになった
神原

「あぁ…私の部屋の畳はこういう色をしていたな！」
暦
「…もう少ししっかりしたいが本題から逸れる…」
楓
「そうだった…神原…その腕見せてもらってもいいかな？」
神原
「…もう隠しても意味無いか…」
包帯を外す
現れたのは毛に覆われた獣の手だった
暦
「触っていいか？」
楓
「…阿良々木君が触るの？」
暦
「変な誤解されるような発言しないでくれ！」
おぉ…すごいサワサワしてる…
神原
「ヒャン／／」
暦
「変な声出すな！」
神原
「いや、阿良々木先輩のテクが凄くて…
もうビショビショだ！」
暦
「いよいよストレートな下ネタぶちかましやがった！」

楓
「…しかしまぁ…融合というか…なんというか…
侵食？」
暦
「…なんというか…猿みたいな…」
神原
「あぁ、猿の手だ」

０１０

ここからは神原さんの昔語りだった

要約しよう

３つだけ願いを叶えるというミイラの腕を
昔、母から託された

両親が他界し転校

転校先で馴染めずに運動会がやってくる

昔は運動神経が悪く、ミイラに願った
『足が速くなりたい』と

結果
徒競走で自分と同じ番で走るハズだったクラスメイトが
何者かに襲われる

楓
「それで走り込んで自力で足を早くしたと…」
暦
「…篠宮、何か分かるか？」
楓
「私は専門家じゃないからねぇ…ただ…」
暦
「ただ？」
楓
「猿の手って侵食するイメージ無いんだよねぇ…
なんて言うか…
『悪魔に魂を喰われてる』みたいな風に見えるんだよね」
暦
「悪魔って…」

私は息を整える

０１１

楓
「…それに…猿の手なら…
そもそも神原さん不幸になってないし…」
暦
「いや、クラスメイトが怪我したんだぞ！」
楓
「それで？怪我した彼らと神原駿河…
どっちが不幸だ？」
暦
「それは……」
楓

「阿良々木…お前はホントお人好しだよな…
本性隠したクソ野郎の話すら信じるんだからな」
暦
「な!?」

私は首をグリンと曲げる

楓
「神原駿河…お前…適当抜かすなら協力しねぇからな?」
神原
「……」

生唾を飲む神原駿河

楓
「…神原駿河…お前、何を願った?」

神原
「…戦場ヶ原先輩の傍に居たいと願った」
楓
「誰も上辺の話なんざ聞いてねぇよ
本心の方を聞いてんだよ」
神原
「それは……」
暦
「…篠宮…」
楓
「……まぁいい……どうせ似たような事聞かれるだろうけど
忍野さんの所に行くのが手っ取り早い
レイニーデビルって言えば伝わるよ」
暦

「レイニー…デビル？」
神原
「…それは？」
楓
「…掃除中に雨合羽が出てきたからね…
まぁ…私はこう言ってたって伝えといて」
私は頭を抑えて部屋から出る
楓
「あとは任せるよ、阿良々木君」
暦
「篠宮、お前は？」
楓
「…頭痛い…」
暦
「…こっから徒歩はキツイだろ…」
楓
「…頑張って帰る」
神原
「私は走れるから阿良々木先輩の
自転車の後ろに乗ってくれ！」
楓
「…分かった」
０１２

楓
「…というわけで…」
忍野
「…へー…レイニーデビルねー…ま、合ってると思うよ」
楓
「…そうですか」
忍野
「しかしまぁ…調子悪そうだね」
楓
「…さっきよかマシです…」
暦
「それで忍野、どうしたら神原の腕を元に戻せるんだ」
忍野
「…僕としては『腕を切り落とす』が1番オススメだよ?」

神原
「ッ…」

暦
「何言ってんだよ忍野！」

忍野
「だってさぁ…人1人殺そうとした代償としては安いもんでしょ?」
楓
「願いを叶えさせるか、強制的に破棄させるか…
今の阿良々木君にはそれぐらいしか選択肢はないよ」
暦
「なんでだよ!」
神原
「……」
楓

「そもそもさ、戦場ヶ原さんの隣に居たいって願いでさ
阿良々木君が狙われるのはおかしくない？」
暦
「それは…戦場ヶ原の隣にいる僕が邪魔で…邪魔…で…」
楓
「そう、邪魔だから消そうとした
それが答えだよ
願いには表と裏がある
『戦場ヶ原先輩の隣に居たい「けど」隣の男が邪魔』
これが神原駿河の願いの全貌
…そうでしょ？神原駿河さん」
神原
「……」
楓
「沈黙は肯定とみなすよ…
まぁ、早い話、阿良々木君が死ねば全部丸く収まるって訳」
暦
「…そんな…」
楓
「で、どうする？ほとんど接点の無い後輩の為に命、捨てるか？」
暦
「…僕は…」
忍野
「…転校生ちゃん…ひとつ方法あるでしょ？」
楓
「…阿良々木に出来ると思います？」
忍野
「…仮にも不死身の吸血鬼だしね…
可能性は０では無いんじゃないかな？」

楓

「…ひとつ…とてつもなく面倒臭い方法ならある」

するがハンド　其ノ参

０１３

楓
「…とてつもなく面倒臭い方法ならある」
暦
「…教えてくれ、篠宮！」
楓
「神原の実力…もといレイニーデビルでは
勝てない存在になればいい」
暦
「悪魔と戦って勝てってことか？」
楓
「…別に勝たなくてもいい…殺されなければそれでいい」
神原
「…阿良々木先輩…」
暦
「…わかった…その方法で行こう」
忍野
「おや、即決かい？
夢を叶えられないって事は
その腕は取れないって事になるんだけど？」
暦
「な!?
俺は腕を元に戻す方法を」
楓
「ほっときゃ取れるよ、ポロッと
まぁ、それなりに時間はかかるけど…」
暦

「…いや、だから！」
楓
「無いよ、阿良々木が死ぬ以外で
今すぐ元に戻す方法なんて」
暦
「そんな…」
楓
「願いを叶えさせれば簡単に取れるだろうよ…
ただし、阿良々木君は死ぬ

願いを叶えさせなければ簡単には取れない
でも、阿良々木君は生き延びる

私は人を呪った対価としてはまぁまぁ妥当だと思うよ」
暦
「呪いってそんな…」
楓
「人の不幸を願ったんだ…それが呪いと何が違う？」
神原
「いいんだ、阿良々木先輩…
これは私が背負うべき罪だ…」
楓
「何カッコつけてんの？
自業自得でしょ？」
暦
「…篠宮…僕が生き残る方の手段なら
腕はいずれ取れるんだったよな？」
楓
「使わなければ…ですよね？忍野さん」
忍野
「そうだね…まぁ…次は三回目になるから

使えば確実に次は無いね
僕の見立て的には２０歳頃には取れるんじゃないかな？」
楓
「だ、そうだよ？」
暦
「神原…この方法でいいか？」
神原
「私は阿良々木先輩の意向に従う」

０１４
そんなこんなで夜
楓
「…あ」
忍野
「どうしたの？転校生ちゃん」
楓
「あ、いや…戦場ヶ原さんだったら
もっと早く解決出来るかもなって」
忍野
「へぇ…その方法は？」
楓
「…彼女、意外と独占欲強いですし…
案外『あなたを殺した人を殺す』とか
『あなたを殺して私も死ぬ』とか言いそうだなって…」
忍野
「…あー…確かにそれなら百合っ子ちゃんの願いは叶わないね」
楓
「百合っ子…」
忍野

「あれ？違うのかい？」
楓
「多分あってると思いますけど…」
忍野
「さて…ちょっと結界の様子でも見てくるかな…」
楓
「あ、いってらっしゃい」

015

なんでさ…

戦場ヶ原
「……」

なんでいるのさ…

楓
「…あら、戦場ヶ原さん奇遇ですわね…オホホホホ」
戦場ヶ原
「楓さん」
楓
「ホントすいませんした…」
戦場ヶ原
「別に怒ってないわ…ただ、寂しかったわ…」
楓
「…仲のいい後輩だったって羽川さんから聞いたから…
とっとと解決した方がいいなって思ったんだけど…」
戦場ヶ原
「…これは、阿良々木君とはしっかり話さなきゃダメね」

忍野
「阿良々木君なら上の階だよ」
戦場ヶ原
「ありがとうございます」
楓
「…あまり阿良々木君を責めないであげてね？」
戦場ヶ原
「…考えとくわ」

全力で責めまくる奴だ

０１６

後日談…というか今回のオチ

結果から言えば
戦場ヶ原さんが美味しいところ全部持ってった

何で戦場ヶ原さんが現れたかは簡単だった
忍野さんだった、阿良々木君の携帯を使って呼び出したらしい

楓
「んで…何してんのさ」
神原
「何って、阿良々木先輩が家から出てくるのを待ち伏せしている！」
楓
「胸張って言うな」
神原

「あぁ、心配しないでくれストーキングの為では無い
戦場ヶ原先輩から向かいに行ってとの命令でな！」

戦場ヶ原さんと神原さんの関係は昔までとは行かずとも
前よりは良くなったらしい…まぁ…嬉しい限りだ

暦
「いってきま…うわぁ!?」
神原
「やぁ！阿良々木先輩！
いい天気だな！今日もいい日になりそうだ！」
暦
「僕的には最悪の出だしだ！」
楓
「…やれやれ」